
ホームクルス

心の壁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホムンクルス

【Nコード】

N4828F

【作者名】

心の壁

【あらすじ】

魔導師『ウィルストン・ハイリア』と彼に造られたホムンクルス『シオン』。雑貨屋の娘や薬屋の息子と関わって、だんだん人間らしくなっていくシオンの心には……。切なくて儚いファンタジーラブストーリー。この小説は、縦書き推奨です。かと言って、横書きで読んでも特に支障はないです。個人的な問題です。

レンガで出来た壁。ランタンで灯された薄暗い照明。机の上にあるビーカーやフラスコなどの実験器具のせいで、この研究室は異様な雰囲気をかもし出している。

部屋には使い込まれた灰色のローブを着た赤髪の青年と、そこらへんにあった布で間に合わせたような服を着たショートカットの金髪の女性と、猫の僕がいる。

「まさか、これが欠けていたとは……」

そう呟く赤髪の青年はウィルストン・ハイリア。僕はウィルと呼んでいる。魔導師であり、僕の飼い主でもある。彼は金髪の女性に魔法を使って色々調べている。それに対して、金髪の女性のほうは微動だにしない。

「仕方ないか。生活に支障はないからひとまずは安心か……」

ウィルは一息ついてから先ほどとは違う呪文を詠唱した。

すると、彼女が初めてピクリと反応した。

「肯定だったら首を縦に振って、否定だったら首を横に振るんだ。わかったかい？ 決して喋ってはいけないよ」

ウィルがそういうと彼女は首を縦に振った。

「よし、目を開けていいよ」

彼女はゆっくりと目を開けた。吸い込まれるようなエメラルドグリーン目の瞳が姿を現す。

「気分はどうだい？」

彼女は思わず声を出しそうになったのか口が動いた瞬間、驚いた顔を浮かべると同時に口に手を当てて首を上下に動かした。

「それはよかった」

彼女は周りをキョロキョロと見渡し、近くにあった机の上から紙とペンを取って文字を書いた。

『ここはどこ？』

彼女は不思議そうな顔をしながら書いた紙を見せる。

「えーっとね。ここは僕の研究室。君は僕が造り出した人造人間・ホムンクルスなんだ。限りなく人間に近い存在として造り出したから君には自覚がないだろう」

赤髪の彼はホムンクルスの説明を始める。

今までのホムンクルスは空気に触れたり動いたりほんの些細な事で原子分解という泡と共に原子単位に分解されてしまっていたのだ。しかし、彼の研究により魔法と錬金術の合成によりそれを最小限に抑える事に成功したという事。さらに造る際に人間の細胞を混ぜる事によってより人間らしく物事を考えたり行動したりする事が出来るようになった事。その他にも色んな研究成果により、彼女はこうして生まれた時点で基礎的な知識や言語理解も可能になった事。その間、彼女は静かに聞き続けていた。

「で、ここが一番重要なんだけど」

先ほどとは違うトーンでウィルは切り出す。

「君に残っている原子分解の条件なんだけれども、さっき調べて一つだけ見つけたんだが」

先ほど調べていたのはその為だったようだ。

「君は言葉を発すると原子分解してしまうんだ。だから喋ってはいけないよ。喋ってしまうと君の存在は消滅してしまう」

ウィルの声にはなにやら重みを感じる。僕にはそれが理解できる。僕はその理由を知っているから。

「僕はここ数年、完全なホムンクルスを造り上げるために研究しているんだ。だから君を失う事は、僕にとって今非常に惜しいことなんだ。だから、どうか約束してくれ。お願いだ」

ずっと話を聞いていた彼女はこくりとうなずいた。

「ありがとう。ああ、そうだ。紹介がまだだったね、僕の名前はウィルストン・ハイリア。ウィルと呼んでくれ……って、すまない。喋ってはいけないんだった」

それを聞いて、彼女は笑った。その笑顔を、僕は何年か前に見た

覚えがある。凄く惹かれる可愛い笑顔だと僕は思った。

「それと、こつちがレオン。結構長い事飼っている僕の猫」

彼は机の上で見ていた僕を紹介した。僕はなんだか照れくさくて彼女から目をそらしてしまった。

「とりあえず、君の名前も付けないとな……。何がいいかな……」

僕から注目が外れたようなので僕はまた二人のほうを見た。

すると、彼女はさきほどから持ち続けていた紙とペンを使って三つの文字を書いた。

その紙をウィルはじっくり見つめてから、

「『シオン』か……。いい名前だね。よし、君の名前はシオンだ。よろしくね、シオン」

彼は手を差し伸べ、彼女はその手を握った。

あたしの名前はエリザベス。みんなはエリーって呼んでいる。この町の雑貨屋の一人娘であり、看板娘である。この店は特に繁盛しているわけじゃないけれど、鼻屑にしてくれている人がちらほらいるのでそこそこの経営は成り立っている。

この雑貨屋、数年前は骨董品屋をやっていたのだ。だが、数年前にお父さんが死んでからは骨董品の目利きの出来ないあたしとお母さんしかいなくなってしまったので、とりあえず何でも屋のような感じで雑貨屋を始めたのだ。一応骨董品屋の名残で骨董品も置いてあるのだが、色んなものに埋まっついていて手入れも施されていないしどこら辺にあるのかもわからない。

基本的にはお母さんとあたしで暇な時に交代して店番をするのだが、今日は違う。今日は魔導師さんが来るのだ。

魔導師さんは町から少し離れた館に住んでいる。週に一回、魔導師さんは買出しのためにこの店にやって来る。本当はこの店、魔導師さんが欲しがるような一週間分の消耗品は取り扱っていないのだがお父さんの代からずっと魔導師さんのために準備しておいてあげているのだ。

ちなみに魔導師さんはあたしが子供の頃から青年の姿である。それは魔導師さんが異端者という特別な能力者だからである。異端者の詳しい事はよく分らないが、とりあえず不老ということしか知らない。

魔導師さん、最近はホムンクルスといういわば人造人間のようなものを造る研究をしているらしい。そのホムンクルスが完成したらいつかその子と二人でこの古びた雑貨屋に訪れて欲しい。そんな期待をしながらあたしは魔導師さんが来るのを待った。

毎週水曜日の午後、魔導師さんはやってくる。その日は必ずあたしが店番である。

お母さんはその日に店番をやりたがらない。と、言うより魔導師さんと遭いたくないのである。今やこの町のほとんどがそんな考えを持っている。数年前に起きた事件の原因が魔導師さんにあるからである。魔導師さんはこの町では忌み嫌われているのだ。あたしのように魔導師さんと仲良くしているのはこの町で指折り数えられるほどである。

チリンチリン――

出入り口のドアに付いてある鈴が鳴った。

「いらっしやい――あ。魔導師さん」

「やあ、こんにちは」

噂をすればなんとやらである。魔導師さんはこんな真夏にいつもの頭から足元まで隠れてしまう灰色のフード付きのローブを着ていた。流石にフードはしていないが、やはり好きなのだろうか。魔導師さんはフードをしていないせいか、赤髪と髪に負けないくらい紅色をした瞳がよく見える。いやあ、かっこいいなあ。

「今日の分は用意してあるよ――って、そちらの方は誰です？」

魔導師さんと一緒に、魔導師さんと同じ灰色のローブを着た金髪の女性が入ってきた。

「見慣れない人だけれど………はっ。まさか研究のためにどこから拉致してきたとかっ――」

「いやいや、そんなことしないよ。この子は以前言っていたホムンクルス。ついこの間完成したんだ。名前はシオンって言っんだ」

金髪の女性は静かに会釈した。ローブの隙間から、彼女はローブの下に神官の法衣を着ていたのがちらりと見えた。

「え！？ 本当に！？ ホムンクルス、完成したんだ！？ 嘘じゃないよね！？」

「いや、だからここに本人がいるって……」

私はカウンターの椅子から立ち上がり、ホムンクルスのシオンちゃんに近寄る。じろじろとなめまわすように観察するが、彼女は口をつむっていた。

「へえ、結構見分けが付かないんですね。本当の人間みたい」と、ここでふと気付く。

「……もしかして、この子、喋れないの？」

「ああ、うん。まあ、近いものではある」

そして、魔導師さんは原子分解とシオンちゃんの原子分解条件を判りやすく説明してくれた。

「彼女にはメモ帳とペンを渡してあるから、彼女の発言は基本的に筆談だから。よろしくね」

魔導師さんがさういうと、シオンちゃんはメモ帳を取り出して、『よろしく』と書いてあたしに見せてくれた。

「よろしく、シオンちゃん。あたしはエリザベス・コーラル。みんなからはエリーって呼ばれてるよ」

『私はシオン。これからもよろしく』

「あ、そうだ。シオンちゃんお古でよければあたしの服あげようか？ どうせ魔導師さんの家になんてシオンちゃんに似合いそうな服無いでしょー」

「ちよつとまで、エリー。いくらなんでもそんな事は無いぞ」

「いやいや、そんな事ないって。シオンちゃん、どうする？ いる？」

『うん。ほしいな』

「ほら、魔導師さん。シオンちゃんだって他の可愛い服が欲しいんだよ。そんな神官でもないのに法衣を着てることなんてないんだよん」

「う……うん。まあ、そうだな」

「はい決定。じゃ、来週来る時まで準備しておくね」

この一連のやり取りが可笑しかったのか、シオンちゃんは嬉しそうに笑っていた。

その笑顔は天使のような笑みだった。

シオンが生まれて二ヶ月が経った。外はもうすっかり秋の空気になった。シオンはエリーやエリーの幼馴染である薬屋のジョン、そしてレオンと一緒に色んなところに出かけたりして色々知識や経験を増やしていき、少し女の子っぽくなってきた気がする。むしろ、エリーについて行って女の子っぽくなるのもちよっとおかしい様な気がするのだが、まあ、そこはシオンの性格なのだろう。最近はず分分解が全く無い完全体のホームンクルスを造る研究の手伝いもしてくれている。

午後一時半ごろ。この時間帯は食事の後片付けも終わり、僕は個人的に自由時間と決めている。シオンもこの時間帯は決まった場所にはいない。今日はエリーたちの約束も入っていないようなのでたぶん館のどこかに入るのだろう。レオンも見当たらない。どこに行ったのか。

僕は先日エリーに頼んで取り寄せてもらった小説が読み終わったので、本を持って書斎に向かっていた。僕の書斎は昔からの趣味である読書により読み終わった本を保管するためだけの場所となっており、既に本棚しかない部屋だ。なんせ何十年も色んな本を読み続けているのでかなりの本の量になってしまったのだ。整理して処分するにも、もったいない気がする処分で残らずに残っているのだ。

書斎に着くと、扉が開けっぱなしになっている事に気がついた。僕は開けたドアは必ず閉める性格なので、中にシオンかレオンがいるのだろうと思い、書斎に入った。

書斎に入り確認してみると、窓に一番近い本棚を背もたれにして地べたに座って本を読むシオンがいた。カーテンから差し込む光がシオンの髪を輝かせる。まるで、絵画のような光景だと僕は一瞬感じた。

その場に立ち尽くしていると、僕の気配に気がついたのか、ションがこっちを向いた。

——あ、ウィル。どうしたの？——

ふと、そんな声が聞こえた——気がしただけだった。ションはこちらを見たまま首をかしげていた。僕はションに近づきながら声をかけた。

「やあ、ここにいたんだ」

ションは本にしおりを挟んで懷から筆談セットを取り出し、サラサラと文字を書いて僕に見せてくれた。

『この部屋に置いてある小説は結構好きな物が沢山ある』

「そうなんだ。その本は……だれだったかな」

僕はションが読んでいた本を取り、表紙を見る。

「ああ、この作家か。僕もこの作家は好きでね、この人の本は全部ここにあるよ。結構古いんだけどね」

『この人の書く恋愛小説は今まで読んだ小説の中で一番好き』

「そうか。いや、やはりいい作家は誰にでも分かるものなんだろうね。僕もその人の小説は好きだよ」

ションは笑顔でうなづく。

「うん。じゃ、僕はこのあとやることがあるからこの小説置いたらいくね」

僕が離れるとションは笑顔で見送ったあと、読書に戻った。僕は持ってきた本を棚に入れて書斎を後にした。

同じ本を好きになる人が近くにいるのは嬉しい事である。やはりあの人の影響だろうか。あの人はさっきションが読んでいた小説をものすごく気に入っていた。

——あの人。

数年前に死んでしまった僕にとっての最愛の人。僕が初めて愛し、僕の人生で幸せというものを実感させてくれた人。僕と同じ時間を歩んでくれた人。

僕はやはり、ションと彼女を重ねていたのかもしれない。彼女の遺

伝子を使っただから？ 彼女と名前が同じだから？ 彼女の仕草が似ているから？ それよりも、彼女と姿が似ているからだろうか――

チリンチリン――

俺が雑貨屋のドアを開けると、ドアについている鈴が鳴った。こは幼なじみのエリーが住んでいる家である。よく店番をしている事が多いので、俺はここでエリーと話すことが多い。

「あ、いらっしやいませ――なんだジョンか」

エリーは俺と確認するとカウンターの椅子にぼすりと座りなおし、カウンターに置いていた小物を掴んだ。

「おい。なんだってなんだよ。なんだって。こうして暇しているだろうと思って来てあげたんだろー」

俺は店の中に入りながらエリーに文句を言う。エリーは椅子に深く座りながら先ほど掴んだ何かをいじっていた。

「まー、シオンちゃんか魔導師さんだったらよかったなーって思ってたさ」

「いやいや、ウィルさんが来るのって水曜だろ。今日じゃないだろで、なにやってるの？」

カウンターまで近づき、彼女が遊んでいるものを確認する。

「いやあ、ルービックキューブ。昨日その棚の奥でね」

そういつて彼女は俺の右側を指差す。振り向くとごちゃごちゃに商品が押し込まれている棚があった。

「整理してる時になんか見つけちゃったからさ。なんとなくハマってるそこ」

「あれで整理したのか……？」

混沌と化している商品棚の前ではそういうしかなかった。

「いやー。こんなの見つけちゃったからさー。なんか片付けるの面倒になっちゃってさ」

「それで結局整理を放棄か……」

毎度の事だが、ため息が出てしまう。エリーがこの店を整理しよ

うとして成功した例は一度も無い。

俺が整理を手伝った事が何回かあるが、結局俺一人でやった記憶しかない。

「あー。なかなか元に戻せないなー。ムカついてくるんだけど。これ」

とうとうルービックキューブも放棄した。昔から飽きっぽいところがあるんだよな。

「ちよつと貸してみな」

俺はエリーがカウンターの上に放棄したルービックキューブを取った。

「できるの？」

「いや、わからない」

そういつつ俺は黙々とルービックキューブをいじりだす。エリーは椅子ごとこつちを向いて俺がチャレンジする所をじつくりと見つめる。

「……ちよつとまって」

「ん？ なに？」

「そんなにまじまじと見つめられると困るんですけど……」

「あー、気にしなくてもいいじゃん。別にやましい気持ちなんて無いんだし」

——そんなに普通に否定されると微妙に嫌な気持ちなんだが。

「まあ、いいや。仕方ないから店の整理でもしますか」

そういつてエリーは椅子から立ち上がる。ルービックキューブをいじる俺の横を通り過ぎて棚の整理を始めた。

二人とも黙々と自分の作業を始める。それが数十分間続き、なかなか成功しないルービックキューブに俺は飽き始めてきた。

「そういえばさ」

そんな時、エリーが声をかけてきた。

「魔導師さん。ウィルさんの事。どう思う？」

深刻そうなトーンで彼女はそう聞いてきた。

——唐突によく分からない質問をしてくるな。

「一体どういうことだ？ エリーらしくも無い」

「いや、あの事件でさ、魔導師さん……町の人に嫌われてるじゃん。そこんところ、どうなんだろうね」

——あの事件。

数年前に発生したこの町を襲った事件。ウイルさんの研究で造った動物型のホムンクルスが不慮の事故により暴走し、魔物化してしまいこの町を襲ったのだ。死者数名・負傷者数十名という大惨事になった。その被害者の中にエリーの父親もいたのだ。

彼がこの町にいた数十年間、彼はこの町のためになる事を沢山した。天候を安定させる魔力結界。魔物が入って来れない魔力結界。魔力を原動力にして動く隣町との交通手段。そのほかにもいろんなことをやっていた。その矢先にこの事件である。

「まあ、ウイルさんとしては色々と不便になったんじゃないかな。

この店以外にこの町で行ける所なんて無いだろうし」

「そうだよ。でも、何とかしてあげたいなーって思う時って無い？」

魔物が入って来れない結界のおかげでこの町は魔物に対抗する武力を持たなくて済んでいたのがこの事件の大きな痛手となっていた。結果その魔物はウイルさんが退治して消滅させたのだが、この事件により悪い印象を与えてしまった。

——あの人は悪魔と契約しているのよ。

——あの人は、異端者だったしね。

——研究と言って、人体実験をしてるらしいわ。

町の人はある事無い事ばかり騒ぎ立て、ウイルさんを嫌った。俺はその事件があったころ、まだ幼かったので事件そのものは覚えていない。ただ、両親に町の離れにあるウイルさんの館には近づいてはいけないという事を聞かされた覚えはある。

「それは、もちろんあるさ。でもなんで今それを聞くんだ？」

「魔導師さん、シオンちゃん造ったでしょ。今またそれで騒がれて

るけれど、実際凄い事じゃない。今まで出来なかった事を実現してるんだよ」

確かにそうである。町を襲ったホムンクルスと同じような人型のホムンクルスを造ったのだ。騒がれないわけ無いが、実際それを造る事だけでもかなりの労力を必要とするはずだ。それは評価されてもいいはずだ。それなのに。

「たぶん。怖いんだよ。以前のような事が起きるのが」

「だって、魔導師さんだって何年もかけて研究してるんだよ。みんな、もう暴走する事なんてないと思わないのかな」

「一度感じた恐怖は簡単には取り除く事が出来ない。たぶんそういうことなんじゃないかな」

振り向くと、いつの間にか、エリーの手が止まっている。

「ひどいよね。あたしたちには、なんにもできないのかな。いつもいつも考えては何も出来ないっていう答えに当たっちゃうんだ」

エリーは半分泣き出しそうな声で喋る。

「俺たちには何も出来ない。確かにその通りだ。俺らはまだ子供だし、それにどんなに説得したところでも魔物に襲われる恐怖を植えつけられた人にはなかなか通じないだろう」

「魔導師さん、それでよく引越さないね。なんでなんだろう」

「たぶん、ウィルさんはこの町が好きだから。この町との関係を元に戻したいんだよ。ほら、ウィルさん昔は世界中を旅してたって言うってたじゃん。その末にこの町に着たんだ。この町には結構な思い入れがあるんじゃない？俺はそう思うよ」

俺の手の中でルービックキューブがカチリと音をたてて完成した。

僕たちは今、ウィルが作った魔力を原動力として動く乗り物で隣町に向かっている。今日はシオンとエリー、そしてジョンと僕の三人と一匹で隣町に遊びに行こうとしているのだ。

「今日は冬服を買いにいこー」

シオンと雑貨屋に行くと、突然エリーが言い出したのだ。

月に二、三回はこのメンバーで隣町まで買い物に出たり色んな所に出かけている。基本的にはエリーとシオンが隣町に行く約束をするのだが、僕はいつもシオンについて行ってるし、隣町に行く時には必ずと言っていいほどエリーがジョンを荷物もちとして引っ張ってくられてるから結果的にこの三人と一匹の形になってしまう。

ガタンと音がして、乗降口が開いた。隣町に着いたのだ。

「いやー。着いた着いたー」

降りたエリーが伸びをしながら叫ぶ。僕たちの住む町とこの町は結構離れているのでウィルが作った乗り物でも二時間かかってこの町に来ているのだ。

「さて、いつもの仕立屋さんに行こうか」

エリーの号令にシオンはうなずき、ジョンはだるそうに続き、僕はみんなに付いていく。

この町はあの事件の影響を受けていないので、ウィルに対する嫌な噂は聞かずに済む。だから、エリー達も安心してこの町を周る事が出来るのだ。

「ジョンも自分の服とか買う？ あたしが選んであげるよ」

歩きながら突然エリーがジョンに向けて聞いてきた。ジョンは突然の申し出に驚いた顔をした。

「え？ 俺が？ いや、いいよ」

ジョンは突然の申し出というより、ジョンに向かってエリーからそんな発言が出る事に対して驚いているのだと僕は思う。

「そんな遠慮しなくてもいいって。いつも荷物持ちさせてるんだからそのくらいはしてあげるよ」

「うーん。じゃあ、お願いするよ」

「よし、決定。そうと決まればさっさと行くよー」

先導するエリーはそう言って仕立屋に向かって走り出す。

「おい！　ちよつとまってよ！」

僕らはエリーを追いかけるように仕立屋に向かった。

行きつけの仕立屋は商品数が豊富で、常に色んな服が店においてある上に、頼めば一週間程度でオーダーメイドの服を仕立ててくれる。値段もそんなに高くはないし、結構お得な店なのである。

「じゃ、あたしはちよつとジョンの服見てあげてるからシオンはちよつとだけレオンと一緒に服見ててねー」

そう告げて、店に着いたエリーはジョンと共に店の奥に消えてしまった。

全く、自分勝手な人である。

シオンと僕はそのあと僕と一緒に少し店内を回った後、男性服のコーナーに来た。エリーたちの声が近いのでこの辺りで服を選んでいるのだろう。シオンはエリー達のところに行くのかと思ったら、進路をすこし変えてコートが並ぶ辺りに向かった。その中で、灰色のコートを手に取ってから僕の目を見つめる。

「なんか、これウィルが着そうだよね」

僕は言葉を喋れないもの同士の場合、目を合わせるだけで何を喋りたいのか解ってしまう。これは僕の異端者としての能力で、彼女は最近になって知ったようだ。ちなみに、異端者とは人間だけになるものではない。僕は昔ウィルと一緒に旅をしていた頃があり、その時に色々あって異端者としての能力を手に入れたのだ。そういうわけで、シオンと筆談ではない会話が出るのは僕だけなのだ。

『確かに。そんな服着るね』

僕がそう返すとシオンはいつもの笑顔を見せて笑ってくれた。

「あ、シオンちゃん。意外と近くにいたんだね」

ジョンの服を色々を選んでいたエリーが僕たちのところにやってきた。

「ジョンのほうはそろそろいいから、今度はシオンちゃんの服を選んでみよう」

シオンはエリーの言葉に対してうなづく。エリーの服選びのセンスは僕も認めてしまう。ウィルの服も選んであげればいいのと思ってしまう。ウィルは暗い服しか着ないから結構エリーならいい服を選んでくれるはずだ。

二人は女性物のコーナーに進んでいく。僕もそれについていきながら、ジョンの姿を探してみるが見渡す限り、ジョンらしき人物は発見できなかった。たぶん、自分の服の会計を済ませたらいつものように店の前の石段に座り込んで待っているのだろう。

「これなんかどう？ シオンちゃんに似合うかも」

エリーは一着のセーターを取り出していた。それは全体的に黒いセーターだが、胸元にちょこんと小さめの天使の羽根が描かれているだけの服だった。しかし、シオンは気に入ったようで、大きく頭を上下させると早速試着室へ行ってしまった。

上を着替えるだけなので、シオンはすぐに出てきた。キラリと光る金髪に対して漆黒の服という光と闇のような対極差が意外にシオンの雰囲気似合っていた。それに加えて、胸元の天使の羽根がすこしばかりの可愛さを主張していて、なんともいえなかった。

「うん。やはりあたしの眼力に間違いは無かった。ねー、レオンー」
「にゃー」

僕はエリーの問いかけに答えるように鳴いてみた。

褒められたシオンはなんとも嬉しそうな笑顔を見せて僕に視線を合わせてきた。

『どうかな？ レオン』

シオンは僕に同意を求めるような眼で見つめた。実際もうエリーの褒めに同意したのだが、僕以外にとってあれはただの鳴き声にし

か聞こえないので聞いてくるのも不自然ではないだろう。

『うん。いいと思うよ』

僕は素直にそう答える。すると、シオンはまた嬉しそうな笑顔を見せてくれる。

『ねえ、レオン——』

シオンはしゃがみこんで僕を撫でながら視線を合わせ、語りかける。

『——ウィルもこの服、褒めてくれるかな』

唐突に、ウィルが出てきた事に僕はすこし驚いてしまった。驚いた拍子に即答する事が出来なかった。

「よし、シオンちゃん。それは決定ね。じゃ、もう少し探してみようか」

僕が返答を悩んでいる間にエリーが邪魔に入ってくれた。これは偶然だろうけど、ありがたいと思うしかなかった。

エリーの言葉に反応して、シオンは話を打ち切ってエリーの元に向かっていった。

その後、シオンが試着したセーターとその他防寒具などを買って僕たちは隣町を後にした。その際、ジョンが可哀想に思えるほどの大荷物を持たされていた。

そして僕はシオンの心に少しずつ変化が起きていることに気がつき始めていた。

気がつくと、冬も終わりかけの二月になっていた。もうシオンちゃんとの付き合いも半年になる。今日は水曜日で先週は魔導師さんが来たので今日はシオンちゃんが来る番である。

シオンちゃんが来る前に作業を終わらせておいたのだが、やはり今年も渡せるのだろうか。というより今日はシオンちゃんが来るからなおさら渡す機会が無い。どうしようかな。

チリンチリン――

たぶんシオンちゃんである。ドアのほうを見ると、やはりシオンちゃんだった。

「やあ、シオンちゃん。おはよー。ってもうそんな時間じゃないか」時は既に昼を越えている。シオンちゃんはクスクスと笑いながらいつもの商品代が入っている封筒をカウンターの上に出した。

「はいよー。今日はおまけしてシオンちゃんのおやつを増やしておいたよ」

そう言いつついつもの商品が入っている袋を渡す。シオンちゃんはそのようなことなくてもいいのというような顔をしていた。

「大丈夫だって、たまに量を増やしたって太らないって」

あたしはそうやっておどけてみた。それだけで、シオンちゃんは笑ってくれる。こんな素晴らしい笑顔をそんな簡単に見せてしまっではもったいないなあとあたしは思う。

そんな感じで、あたし達は他愛の無い会話をして笑い合っていた。「で、時にシオンちゃん」

あたしは会話に使用していた不要な伝票の裏紙の四枚目を取り出すと同時に切り出した。シオンちゃんは不思議そうな顔をする。

「そういえばどうなのよ。魔導師さんとは」

そつ言い切るとシオンちゃんは驚いた顔をした。そして文字を書くタイピングがワンテンポずれて返事を書いた。

『いやいや、何も無いよ』

その書くタイミングをずらしてしまったのが致命的だった。シオンちゃんは筆談でしか会話する事が出来ないの、文字を書くのは慣れているのだ。それなのに、今のシオンちゃんの字は動揺が隠しきれない文字のブレが生じていた。

「えー、だって魔導師さんはわざわざあなたみたいな女性型のホムンクルスを造ったんだよー。なんかあるでしょー」

シオンちゃんは困った顔をする。あたしは更に追い討ちをかけるように続ける。

「魔導師さんといい雰囲気になった事は無いの？」

『いい雰囲気とは？』

「いやだから、なんかドキツとするような状況とか……。恋愛小説とか読んでるんだからわかるでしょ」

『まあ、何が言いたいかは分かるけれど……。でも、実際どういう感情なのかは私には解らないの』

「む。解らないと来たか。そうかそうか」

まだ半年の命ではその感情を理解するには難しいのか。

「じゃあ、あなたは前に小説みたいな恋をしてみたいと言っていたよね？」

『うん。言ったよ』

「ならば教えてあげる！ あなたは魔導師さんが大好きなの！」

ドビシツと効果音が付きそうな勢いで、あたしはシオンちゃんに人差し指を突きつけた。シオンちゃんはその行動に対して非常に驚いていた。

「ほら、その焦りよう。その焦りが何よりもの証拠よ！」

文字を書くペース、文字のブレ、表情、何もかもがシオンちゃんが動揺していることをはつきり示していた。

『もういいです』

シオンちゃんは紙にそう書いて立ち上がり、荷物を持って店の出入り口へと急いだ。

「あ、ちよつとまてえい！ 逃げる気か！」

シオンちゃんはあたしの言葉を無視して立ち去ろうとする。

「明日はバレンタインデーだ！ シオンちゃんも知ってるだろ。忘れるなよー！」

あたしがそう叫ぶとシオンちゃんは一瞬だけピタリと立ち止まり、すぐに店を立ち去った。

シオンちゃんが去った後、あたしはカウンターの椅子に深く座り込んだ。

「はあ……。何やってるんだか。あの娘に渡しちゃうなんて……。そこまでおせっかいじゃなくてもいいじゃん。……。あたしの馬鹿」

あたしは魔導師さんにあげるために自分で作り、キッチンと包装したバレンタインチョコを彼女の袋の中に入れたのを、少し後悔した。

「よし。完成したぞ」

僕は研究室にて一人で完全体のホムンクルスを造る研究をしていた。そして、今。完全体のホムンクルスを造り出す魔術式が完成したのだ。これをうまく錬金術に組み込ませる事が出来れば、原子分解の無い完全体のホムンクルスを造る事が出来るだろう。後は、記憶の保持が出来る錬金術も完成させれば、たぶん。完璧である。

「にゃー」

突然猫の鳴き声でしたのでそちらを向くと、窓辺にレオンがいた。「おお、レオンじゃないか。今日はシオンと一緒にじゃないのか」僕はそういいながらレオンを抱き上げる。

「さつき、完全体のホムンクルスを造る元の魔術式が完成したんだ。すごいだろう」

僕はレオンに向かって先ほどの自慢をする。レオンは今喋る事が出来ないが、昔は少し事情があつて喋る事が出来たのだ。その名残でレオンは人の言葉を理解する能力があるのを僕は知っている。だから、こうやって話しかけても、

「にゃー」

と言つてなんとなくの抑揚で肯定か疑問か否定辺りを判断する事が出来るのだ。これはたぶん肯定のにゃーであると思う。

「よし。今日の料理は僕の当番だから、今日は僕の得意料理のシチューにしよう。レオンにはお魚でも焼いてあげようか」

「にゃー」

レオンは嬉しそうに鳴いた。僕はそんなレオンを抱いたまま、研究室から食堂へと向かった。

食堂に着くと、僕はすぐさまシチューを作る準備をする。シチューは僕の好物なので、何回も作っている内に得意料理になってしまったのだ。

シチューを煮込み始めて数十分、もうすぐ完成というところでシオンが食堂にやってきた。手には大きな袋が入っているのでエリーの商品の中に入っている食料を保存庫に入れるためにきたのだろう。「ああ、ちょうど呼ばうかと思っていたんだ。もうすぐ夕食が出来るよ」

シオンは僕から目を背けるようにして保存庫に食料を入れて、食卓についた。ちょうどそのタイミングでシチューが完成したので僕は二人分のシチューを皿に盛り、食卓に出した。レオンのお魚は食べやすいように床に出した。

食事を始めて少し経ち、シオンがなぜか落ち着かない様子なのに気がついた。僕は何か話す事は無いかなと考えた末に一つ的话题を選んだ。

「そうそう。今日はね、シオンが買い出しに行っている間にいい事があってね」

話しかけてもなにやら落ち着かない様子のシオン。むしろ話しかけてから更に落ち着かない気がする。

「なんとね、原子分解が完全に無くす魔術式が完成したんだ」

シオンがピクリと反応する。

「だから、それを応用すれば——原子分解の無い完全体のホムンクルスを造ることが出来るかもしれないんだ——」

その途端、シオンのシチューを食べる手が止まる。

「ん？ どうしたんだい？」

数秒。シオンは動かなかった。

ようやく動いたかと思うと、シオンはメモ帳に文字を書いて、その紙を僕に渡して席を立った。

「え？ あ、ああ。って、もう食べないのかい？」

シオンの背に問いかけたが、そのままシオンは食堂を出て行ってしまった。

僕は、呆然とそこに座り続けるしかなかった。

渡された紙には『おめでとう、よかったね』と書いてあった。

たっ
た、
それ
だけ
が書
いて
あっ
た。

彼女は今日、ウィルを探していた。結局、バレンティンチョコは未だに渡せていない。昼に一緒にご飯を食べた時にはいたのだが、それから姿が見えなくなっていた。たぶんどこかに出かけているのだろう。そう思った彼女は玄関前でウィルが帰ってくるのを待った。玄関の石段に座って待つ彼女の横に、僕は寄り添って一緒に彼の帰りを待った。

『どうしたらいいだろう——』

彼女は僕のほうを向いてそう告げる。

『私は、もう要らないのかな』

『どうしてさ』

『だって』

一息ついて彼女は続ける。

『研究が終わったから、私はもう要らないのかな』

『研究が終わるとなんでシオンが要らなくなるのさ』

『だって……、私は……』

彼女は視線をそらす。

数秒悩んだ末、再び僕に視線を合わせる。

『私は——失敗作だから。原子分解が起こるから、原子分解の起こらないホムンクルスが造れるようになったって事は……』

『大丈夫だよ。ウィルはそんな人じゃないよ。僕は何年もウィルと一緒に暮らしてきたから分かる』

『でも、もし本当に要らなかったら、わたしの気持ちは伝えるべきなのかな……？』

『シオン……』

彼女は自分の中に起こりつつあった変化に気がついていたので。ウィルに対する気持ちに。

僕は、その問いに答える事が出来なかった。

静寂が、僕たちを包む。

それから何時間が経過しただろう、陽は落ちかけて辺りは茜色に染まり始めていた。そんな頃である。ウィルが帰ってきたのは。

ウィルの手には、何かの袋がぶら下がっていた。それを買に行かのために今日は出かけていたのだろうか。

ウィルは玄関前で待っているシオンと僕に気がついたのか、こちらまで小走りやってきた。シオンは自分が持っているものが見えないように後ろに手を回して隠した。足元にいる僕からは隠しているようには全く見えない。

「ごめんごめん、何も言わないで出ちゃって。心配してくれたのかい？」

シオンはこくりとうなずく。

「ああ、本当にごめん。今日はね、君にプレゼントがあるんだ」
そう言って、ウィルは持っている袋から何かを取り出した。

「はい、これ。本当は女性のほうから渡すものなんだけれども、シオンが知らなかったらどうしようと思ってわざわざ隣町まで行って選んできたんだ」

シオンの目の前に出されたものは、可愛い包装がされていて、ウィルがこの包装をお店で選んで買ってきたところを見ると、おかしな気持ちになってしまった。

「今日はバレンタインでーって言う日だね。本来は女性から男性にチョコを渡すものなんだけれど、今日は特別。君には研究にずいぶん貢献してくれたからね。感謝の気持ちもこめて」

シオンは、ウィルのチョコを片手で受け取る。もう片方の手はエリーから貰ったチョコを隠しているのだ。シオンはチョコを受け取ったあと、隠しているチョコをウィルに向けて突き出した。

「え？ これ僕に？ ああ、なんだ。知っていたのか今日の事。うわー、そうだったのか」

そう言って、ウィルはチョコを受け取ってくれた。

彼女は深呼吸をし、何かを決断したように見えた。

「このチョコどこで手に入れてきたの？ あ、もしかして昨日エリの店に行った時に作ったのか」

そう喋り続けるウィルはシオンは、片手を出して制する。

「え？ なに？ どうしたの？」

夕暮れが辺りを橙色に染めて、雰囲気を出してくれる。

サラサラと、少し肌寒い空気が僕たちを包む。

僕はシオンから少し距離を置いた。

ウィルは戸惑っている。

シオンはもう一度深呼吸する。

そして――

「私は――」

シオンが喋り始めた。

彼女は、生まれて初めての声を出す。

「――ずっと、ずっと――好きでした！！」

辺りを、シオンの声が包んだ。

「え？ シオン！？」

ウィルが驚く。

沈黙の時間を与える隙も無く、その瞬間だった。
原子分解が始まる。

彼女の身体が泡に包まれていく。

彼女の身体が崩れていく。

夕日で彼女の身体は紅に彩られる。

まるで紅蓮の炎に焼かれて消えていくようだった。

彼女は、

その中で、

今までで一番美しい顔で、

思い人に優しく微笑みかける。

「シオン！！ 何やってるんだ！！」

ウィルが叫ぶ。

だが。

彼女の人生が消えていく。

彼女の歴史が消えていく。

彼女の存在が消えていく。

彼女の記憶が消えていく。

それは儚く。

それは哀しく。

それは鮮やかに。

それは桜のように。

彼女は散っていく。

その時間は数秒。

彼が触れる前に彼女は――

――消えてしまった。

後に残されたのは、

哀しみと、

後悔と、

涙と――

「お久しぶりです。元気にしていましたか？」

この教会に入ったとたん、神父が声をかけてきた。

「お久しぶりです。そちらこそ、未だに現役でがんばっています。ご苦労様です」

僕は神父のところまで近づきながら挨拶する。

「もう、三十年になりますね。あれから、どうですか」

この町でエリーとジョン以外に僕のことを気にかけてくれるのはこの神父くらいだ。この神父とはとある事情により、彼が神父という職業についてからの顔見知りである。

「どうもありませんよ。僕はあれから一人身ですよ。僕は、彼女以外考えられないんですから」

僕は神父が立つ場所に一番近い長椅子に、ドサリと座った。

「シオンさん……ですか」

「はい。僕は長年連れ添った彼女以外もう愛する事はないでしょう」

「そういえば、ウィルさん。あなたの研究で造ったというホムンクルスも、彼女と同じシオンという名前でしたね」

「ああ、そうです。僕は彼女の遺伝子を使ってホムンクルスを造ったんです」

「なぜ、彼女と同じ名前を？」

「あれ、僕がつけたんじゃないや無くて自分でつけたんですよ。たぶん、遺伝子の中に何かあったんでしょう。彼女の記憶かなにかが」

僕はそう解釈している。でなければ、あの時にシオンが彼女の名前を出すとは思えない。

「そうですか。それなら、安心しました」

神父は踵を返して十字架を見上げながらつぶやく。

「彼女は、いい人でした。私に神の道を教えてくれて、そして人生の喜びも教えてくれた」

神父は、昔の彼女を思い浮かべているのだろう。

「まあ、普通の神官とは違い、長い人生を生き続けましたからね」
僕も、彼女の笑顔を思い出す。

「私は今でも忘れませんよ。彼女が亡くなった時のあなたの嘆きを。あなたは本当に彼女の事を愛していたのですね」

「さっきからいつてるじゃないですか。僕は、彼女以外考えられないって」

僕がそういうと、神父はまたこちらを振り返って告げる。

「——だからこそ、あなたは彼女の遺伝子を研究に使ったのではないんですか？」

「——っ!？」

言葉に詰まる。返答する事が出来ない。

「あなたは、彼女の幻影を追いつけているのではないのでしょうか。彼女は、姿形は同じでも、仕草や趣味が同じでも、別の生命体です。あなたは、それを理解しているのですか」

「……まあ、分かっていたつもりでしたよ。僕だって」

そしてまた僕は、彼女の姿を思い出す。

「僕だって、彼女の遺伝子を使えば彼女と同じ姿で生まれてくる事くらい、分かっていたんですよ。でも。止められなかった。どうしても」

神父は僕の隣に腰を下ろした。

「あなたは、これからどうするおつもりですか？」

神父は問う。僕の道を。

「僕が今日ここにきた理由は、決断するためなんです」

「？ なにをですか？」

「シオンを再び練成させるか否かです」

「それは、どういうことですか」

「ホムンクルスとして生まれたシオンは、消える前に、僕に好きだと告白して消えました。僕はその答えに応じるか否か。その二つのどちらかを選ぶかどうかを僕は彼女に問われているのです」

「告白して消えた……。という事は、シオンさんはウィルさんに恋愛感情を持ってしまったのですね」

「はい。僕はそれに答えるかどうか、悩んでいるのです」

僕は答えを出す事を躊躇している。彼女を選ぶのか。シオンを選ぶのかを。そのどちらも大切だから。

「答えるかどうかは、ウィルさん自身で決めることです。でも、シオンさんはあなたを好きだと言って消えた。シオンさんは一人の女性として、あなたを好いたのです。ホムンクルスとしてではなく」

神父の言葉は僕の心の奥底に響いてくる。

神父は再び立ち上がり、言葉が続ける。

「ウィルさん。次にあなたが新しく完全体のホムンクルスとして造り出すとして、同じような事が起きたら——あなたはどうします？」

神父は僕を見つめる。

「それは——」

僕は答えられない。

「人々が生命を造り出す事は禁忌とされています。でも、あなたがそれをものともせずホムンクルスを造り出すと言うのなら——」

僕が言えるのはここまでです。ウィルさんのほうが、人生経験は長いのです。あとは、ご自分で考えください」

神父は、そのまま執務室に去っていった。

僕は、その場に残された。

そして、立ち上がった——。

私は、この感覚を知っている。

私は、また戻ってきたのだ。

私は、覚えている。

私は、喋れる。

「気分はどうだい？ 僕の声が聞こえるなら目を開けていいよ」

久しぶりに聴く声だった。

何度も、何度も聞いた声だった。

私は、目を開けた。

「僕の事が分かるかい？」

——もちろん覚えている。

生まれたときのこと。

町の女の子に紹介してもらった時も。

彼と好きな本の話をしたことも。

町の女の子や男の子と隣町に出かけたことも。

彼を好きだと気付いたことも。

彼に告白した事も。

——すべて覚えている。

「ただいま。ウィル」

私がそう言つと、彼は微笑む。

「おかえり——」

そして彼は私の名前を——

F
i
n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4828f/>

ホームクルス

2010年10月10日19時31分発行